

アルケイアー記録・情報・歴史―

第一〇号 二〇一六年三月 一七一―一八四頁

南山アーカイブズ

特集Ⅱ 「展示を利用した自校史教育の可能性」

南山アーカイブズの展示

― 展示室開設と記念シンポジウムに寄せて ―

川
崎

勝

Exhibition at Nanzan Archives : On the Occasion of the Opening of
Exhibition and its Commemorative Symposium

KAWASAKI Masaru

Archeia: Documents, Information and History
No.10 March, 2016 pp.171-184
Nanzan Archives

- 一 「学校体系図」の苦心
- 二 自校史への眼差し
- 三 自校史のなかでの「負の遺産」
- 四 開かれた自校史
- 五 M L A の連携
- 六 展示への一つの視点
- 七 百年史に向けて

南山アーカイブズの展示

——展示室開設と記念シンポジウムに寄せて——

川崎 勝

一 「学校体系図」の苦心

ライネルス館の三階に置かれた展示室のアプローチに、「1932年学校体系図」のパネルが掲示されている。これは、この時期に、どのような学校の設立が可能であるかを考える上で、貴重なメッセージを与えてくれる。じっくりと眺めることによって、当時の「中学校」の位置づけを考えることができるからである。明治以降の日本の教育制度が、決して体系的に準備されたものではなく、時代時代に応じて創られたものが、このような重層的な体系となっていたことが知られる。それは、「1950年学校体系図」と比較すれば、一目瞭然である。明治以降の日本教育史を概観しながら、この初めてとなるパネルを完成させた労苦にまず敬意を表さねばならない。

二室の展示室は、遮光カーテンで柔らかい雰囲気を醸し出している。I室は、神言会・聖霊会の来日から、旧制南山中学校の創立、小学校の附設と廃止、アジア太平洋戦争時の動向、戦後の名古屋外国語専門学校、聖霊高等学校

校・中学校、南山高等学校・中学校、南山大学の創立まで、Ⅱ室は、大学の山里移転から南山大学附属小学校の設立までの、様々な史資料が展示されている。展示室を一巡することで、南山学園の歩みとその時代を知ることができるようになっていく。ここでは、その詳細を記すことは不要であろう。

私は、展示室開館から二ヶ月半を経た二〇一五年二月十九日、はじめて展示を見る機会を得て、次いで、南山アーカイブズ常設展示室オープン記念シンポジウム「展示を利用した自校史教育の可能性」にも参加することができた。その最後に、少々発言させてもらったが、時間の関係で意を尽くすことができなかったので、自校史のあり方と展示について、若干の雑感を記しておきたい。

二 自校史への眼差し

南山学園には、『創立五周年記念南山学園史』（一九三六年）『南山学園の歩み』（一九六四年）『南山学園五十年の歩み』（一九八二年）『南山大学五十年史』（二〇〇一年）『HOMINIS DIGINTATI 1932-2007 南山学園75周年記念誌』（二〇〇七年）などの、学園、単位校の編纂になる十数編の自校史、年誌が刊行されてきた。特に、草創間もない時に五年史を刊行していることは、全国の私学の中でも先駆的なことであり、再評価されなければならない。幸い、近日、「南山アーカイブズ史料集」の一冊として復刻されるということである。自校史への議論の突破口になることは必至である。そして、これほどの刊行物を持つ私学もまた稀であるのであるから、南山は自校の歴史について、決して無知でも、無理解でも、風馬牛でもなかったのである。しかし、大学五〇年史と学園七五周年史の編纂に携わった経験을思い起こしてみると、これらが学園構成員にどの程度浸透していたか極めて疑問であり、残念ながら、

現在でもその危惧は払拭されてはいない。

では、その原因は何であるか。歴史を書くということは、信頼できる史料がどれだけあるかによる。すでに何度か発言したことではあるが、あらためて私の自校史との関わりを述べておく。大学五〇年史の編纂を依頼された時に、史料はどこにあり、どのように保管されているかを尋ねたが、分からないという返事であった。史料がなくて歴史など書けるわけではない、だから、五〇年史は止めて、まず、史料室を作って、史料調査、史料収集を行ない、毎年一冊ずつ史料集を発刊していく、一〇年経てば史料も集まり、一〇冊の史料集を通して、研究も蓄積されて行くであろう、その上で、あらためて七〇周年史を発刊すればいい、五〇周年記念には、「写真集」でも出したら如何かと申し上げた。しかし、にべもなく「立つ本」を作れという返事であった。その本自体の内容に関して、小委員会委員長とも意見が合わず、最終段階で私は委員を降ろされ、ホッとすることができた。次いで、学園七五周年誌編纂の要請を受けた時は、二の轍は踏むまいと思い、史料室を作ること、編纂に関しては専任教員を採用することを条件として、交渉した結果、専任教員（助手）の採用、編纂活動を通じて史料収集を行ない、事業完了後に史料室を作るということで合意して、編纂をはじめた。

七五周年誌編纂に当たっては、存在はしていたのだが実質的には機能していなかった学園史料室を、教員と専任嘱託とアルバイトで復興させて、各単位に協力を要請して史料の所在確認してもらうことを手始めに史料収集を開始し、さらに全単位の教育職員、事務職員が参加する編纂委員会（濱口吉隆委員長）を構成したのである。そこで合意されたことは、七五周年に止めず、差し当たり百周年を目指した活動を行なうことであった。そして、共通認識となったことは、現在ある史料はもちろん、新たに作成される各単位の事務文書をはじめ、教職員、学生・生徒関係、同窓会、関連団体などの現用を離れた非現用文書を、恒常的に、収集、保存、整理、閲覧、活用すること

が申し合わされたのである。七五周年誌の刊行後、編纂委員会は史料委員会に移行し、大学に史料室が誕生したことから、大学の主導により学園史料室を包摂する形で、運営がなされてきた。そして、その発展としての南山アーカイブズの誕生は、大いなる飛躍への第一歩である。

こうして、ようやく、南山の草創期から芽生えていた自校史への息吹が、こうした制度によって保証されることになったのである。

こうした経緯を振り返ってみた時、南山アーカイブズ展示室の開館にあわせて行なわれたこのシンポジウムは、時宜にかなったものであることは疑いない。

三 自校史のなかでの「負の遺産」

高校校での授業体験をもとにした中尾浩康報告は、現在までの自校史教育の流れを総括し、展示史料を利用した自校史教育の問題点を挙げる。この中で特に注目したい発言は、「自校の負の側面をどう教えるか」である。「負の側面」の重要性は理解していても、高校生・中学生の発達段階や進学などへの影響を考えながら取り組まなければならないなど、教育での内容・手法の事前検討の重要性を指摘する。そして、戦前の戦禍を受けた旧制南山中学校を起点に、地域の歴史を掘り起こすことに取り組んだ実践報告も聞き応えがあり、さらに高大連携によるコラボ講座も積極性に富んだ提案であった。

これは、アーカイブズの永井英治報告でも、「負の歴史」として採り上げられた問題である。根拠の曖昧な理想化された自校史に対して、社会の中の存在である大学・学校への視点の重要性を説く。戦前の学校は、いわゆる天

皇制と軍国主義体制の中で自由な教育は容認されないばかりか、自由主義はおろか、キリスト教主義も極端な制限を受けていた。キリスト教主義の学校にも、神社参拝、靖国神社参拝が強要されたことはもちろん、進んで戦争讃美を謳ったことは、紛れもない事実であった。「負の歴史」は、戦前から戦後を一つの流れとして把握しようとする時、避けて通ることにできない課題である。しかし、積極的にそれを行なったところはなかった。一九六〇年以降、唯一、プロテスタントの明治学院が「戦争責任の告白」を行なったことで、物議を醸したが、それは一時のことであり、アイデンティティの回復を実現したものと評価されたのであり、それは正解であった。「負」から「正」への転換であった。「負」との正面からの取組み、対決こそ、「正」を獲得する手段にはかならない。キリスト教主義の基づく教育理念は、同時に社会に対する責任倫理を通底としなければ成立し得ないことを、たえず問い返さなければならぬのである。それは、キリスト教主義とは別の理念を掲げる学校でも同様であることは言うまでもない。

特に現在こそ、「負の側面」「負の歴史」の問題は、重要である。いったい何をもって「負」とするか。例えば、今では誰もが「侵略」を肯定はしないであろう（あるいは、言い出せないでいるか）。しかし、四半世紀前の高校の日本史の教科書から、「侵略」の表現が消されたことを想起しなければならぬし、またそれを容認する教科書がまたぞろ大手を振って登場しているのである。事実を蔽い隠すこと、これは、歴史に限らず、教育の間ではあってはならないことである。ただ、それをどのように正確に伝えるか、そのためには文書史料の正確な読み込み、写真資料、物質資料の的確な評価が不可欠になる。そうした意味で自校史を語る場合に、展示史料は、またとない貴重な宝庫、情報源となるであろう。自校史での「負の遺産」の評価、それはまず、単位の枠を超えた教員同士（教育職員、事務職員の別なく、全構成員という意味で）による、継続的な組織的な研究が保証されていることが不可

欠となるであろう。

四 開かれた自校史

小学校での展示活用の可能性を探った水越健太報告は、アイデンティティを育むために展示史料の教材化を活用し、神言会の来日、中学校の設立、小学校の設置と廃止を、写真資料によって「身近な」分かりやすい、そして、子どもたちとの心的距離を近くする努力が払われている。

こうした中で、注目されているのが、創設時の小学校教育の新展開である「真教育」である。これは、学園七五周年記念し編纂過程でも注目されたことであるが、その意義を十分に検討することができずに、事実を叙述したに止まっていた。これを、現在の小学校で「とても新しい考え方の教育でした」と評価的に扱っていることは、教育実践の中から採り出したものとして、注目されなければならない。

この「真教育」は、大正デモクラシー以降に一時的に開化した自由主義教育を背景として考え出されたものである。南山学園の創設者ライネルスの当初からの教育理念である、「全人教育」、「個性尊重」、「人格の自由」と合致すると考えられたからであろう。ただ、この理念は、南山独自のものではなかった。東京の成城学園で試みられていたもので、小学校の創設に当たって成城から鈴木義男、玉川学園から山西英一を招聘して、基礎作りがはじめられたのである。しかし、十分な展開を見ることなく、忘れられてしまったのである。この「真教育」の再度の掘り起こしは、南山の自校史を考える上で極めて重要な点である。さらに、これは、南山だけの問題ではない。成城学園（成城から別れた、玉川学園、和光学園、明星学園を含めて）で、どのように研究されているか、十分に検討す

必要がある。このシンポジウムに参加された成城学園教育研究所の荒垣恒明氏にも協力を頂いて、両学園での共同研究が開始されることを望みたい。自校史は、自校に止まるだけでは解決できない広がりの中で成立する。これによって、はじめて自校を客観化できるのである。

聖霊中学校高等学校の杉浦泰也報告は、修道会との緊密な関係の中で、三の丸から瀬戸への移転、さらに聖霊学園と南山学園との法人合併という、他の単位には見られない動向の紹介である。二つの法人の合併は全国的にも例がなく、さらに、その経緯についてはほとんど明らかにされておらず、今後の課題である。

五 M L A の連携

人類学博物館の黒澤浩報告、南山アーカイブズの永井英治報告は、いずれも自校史に限らない問題提起がなされた。黒澤報告では、博物館の特徴として、「物質資料（モノ）を活用した教育を実践すること」にあるとし、V T S などを紹介し、展示を活用した教育は「長期的かつ継続的におこなうこと」に意味を強調された。博物館の展示は、学園内の様々な教育学習と結びつくとき、より大きな機能が発揮されるのである。

また、人類学博物館の収蔵品は、展示されている縄文土器をはじめとする考古学資料は、直接自校史の材料とはならないが、しかし、大学の文化人類学研究・教育の基礎をなしたものであり、人類学研究所の歴史を考える上では無視できるものではない。また、江戸時代の農具、今は展示されていないが、これは、この地域の農村で用いられたものも多く、自校史の基盤となる地域史との連携に手懸かりを与えるものでもある。昭和期の家電の展示も同様である。

これは、アーカイブズの展示でも、同様である。さらに今後は、展示だけでなく史資料の活用を進めるため、大学図書館を加えたMLA連携が課題となる。そのためには、大学図書館にも専任教員を置く必要がある。

展示活動と、自校史／自校教育の二つの機能を指摘した永井報告は、キャンパス・ツアーを含めた「モノ」と「現場」を重視している。今回の報告では言及されなかったが、学園の建造物も、アーカイブズの対象たり得ることである。大学の第一食堂の建物の解体に際しての写真による保存という消極的な対応から、大学の山里キャンパス設計模型の修復をはじめ、レーモンド建築の再評価、イルサ・フォン ライスナーが制作した彫刻などの調査がなされ、そのいくつかが「学園史料集」として刊行されてきたことは、時間的、人数的な制約の枠を広げるものとなる。

六 展示への一つの視点

このたび開設された、南山アーカイブズ常設展示は、全体として、各時期のポイントごとに、バランスよく配列され、一巡すれば南山の歴史の一コマ一コマに接することができるようになっていいる。また、それぞれの確かな説明も付され、見学者を自然と学園の中に導き入れることにも成功していると、と評価できる。できれば、これまでに刊行された自校史、年誌や史料集が閲覧できるといいう閲覧室への案内を掲示し、学園史への関心をより高める一助とされたい。

一般に、大学、学園の史料館の常設の展示は、展示開設時点の学園の意向を反映したものにならざるを得ない。それはある程度止むを得ないことであるが、「理想化された自校像」になりすぎると、外部者から見ると鼻白む場

合が往々にしてあるのは事実である。

常設展示は、当然、学園の創設から現在までの主要な歩みを髣髴とさせるように構成される。それには現時点で学園が目指そうとする視点が明瞭にされなければならない。それが、今後の課題となるであろう。

では学園が目指すものとは何か。たとえば、大学では盛んに「国際化」が叫ばれてきた。それはそれでいいであろう。しかし、では、「国際化」とは、どういう内容なのか。これについて、どれだけ大学内部で議論がなされたか、そしてコンセンサスを得ることができてきたかは、私の知るかぎりはまだ疑問である。国際化＝英語教育推進ではないことは確かであるし、英語が国際語として通用しているのも、歴史的に見れば、現時点だけの現象である。オリンピックの会場のアナウンスで使われる原語は、自国語、フランス語、英語の順番である。「国際化」でまず基本としなければならないのは、「自国の文化」の認識である。正しい日本語が使えないものが、国際人になれることはほとんどあり得ない。海外に出た留学生のほとんどが、まず日本の文化を質問されて、面食らうという。故に、私のゼミ生で留学を目指すものには事前に、日本の歴史と、日本の文化に関する書物を読ませるようにしてきた。

日本古代の遣唐使の留学生は言うまでもなく、明治時代以後の留学生は、最先端の学門、技術、文化の受容を目的としてきたが、現在の留学生の役割は、文化受容の担い手から、日本の文化を正確に伝えることにある。文化には、芸術や学門、技術、教育だけでなく、政治、法律、憲法も含まれる。その成り立ち、継承、すなわち「文化＝歴史」の共有、これが「国際化」なのである。南山からの留学生は、日本文化と同時に、学園・大学で培われた「南山文化」の提供者として、諸外国の人たちと交流するわけであるから、まさに南山の歴史と文化を背景とした「使命」の役割をも担っているのである。すぐれて、自校史教育の重要性も、ここにある。

学園の目指そうとしている「国際化」の議論は、自校史の議論と連動してこそ、十分な成果を発揮できるであらう。

う。そして、その議論が進展する中で、「国際化」南山を明示し得る常設展への変化も期待できる。

学園の歩みをビジュアル化する展示は、こうした学園の方向性を明示するものになる。学園の構成員は、教育職員、事務職員、学生・生徒・児童である。展示は、それらの姿を捉えたものでなければならぬであろう。学園七五周年誌をはじめ、多くの年誌類は、それを目指そうとしてはいるが、十分ではなかった。

このたびの展示で特に目を引いたのは、学生の主張の一端が展示されていたことである。いわゆる大学紛争時を扱ったものである。大学史、学園誌では、いずれも学生側の主張を「否」とした姿勢で叙述されてきた。しかし、いずれの立場を取るにせよ、歴史的事実を客観的に考える時、両者の主張が示されなければならない。この展示ではじめて南山大学の学生の主張の一コマを知ることができたのである。学生の主張は、全国的に一樣に見られがちではあるが、各大学ごとにその問題性や主張に特色、差違がある。南山大学の学生の主張は、特に興味あるもので、百年史の叙述には、大いに役立つものとなるはずである。

一つだけ、展示への注文を付けておこう。それは、教職員組合に関する展示が全く見られなかったことである。組合は、大学には存在しないが、学園内にある一組織である。戦前の日本では、労働組合は、国家、経営者からは否定的な扱いがなされてきたが、戦後の民主化の中でようやく日の目を見たといえよう。欧米先進国では、むしろ当たり前の権利であるが、しかし、日本の労使関係ではやはり否定的な意識が現在も直根強い。さらに、宗教を否定する共産主義への警戒から、労働組合運動を社会主義運動と同一視する雰囲気も認められる。信教の自由権と労働者の団結権とは、次元を異にしつつも、立憲体制では不可欠の権利である。

七 百年史に向けて

二〇三二年、南山学園は、創立百周年を迎える。

二〇〇七年に刊行された『HOMINIS DIGINITATI 1932-2007 南山学園75周年記念誌』は、「七五年史」ではなかった。各単位、部局、学部、研究所、図書館、博物館、諸施設などごとに、それぞれの歩みを叙述したに止まっている。それは、先に述べたように、史料室が整備されておらず、史料集めを同時に進めなければならず、史料に基づく研究の場を組織するには至らなかった。そのため、編纂委員会では百年史を目指した組織的な史料収集をしながら、とりあえず七五周年記念誌は単位ごとに執筆を行なうことにし、完成後、編纂委員会を学園史料委員会に移行させて、大学史料室と学園史料室を連携させて、アーカイブズ機能と、自校史編纂体制の中心とすることになったのである。

しかし、今度の「百年史」は、部局史の寄集めであってはならず、史料研究に基づく編纂体制を構築しなければならぬ。まだ先のことと思うであろうが、月日が経つのは早い。最低でも、二〇三二年には、編纂体制を作り、学園史の方向性を定め、史料調査、収集、整理の徹底化、学園史研究の組織化に着手しなければ、間に合わないであろう。猶予は五年しかないのである。学園の目指すものは何か、負の歴史をどのように評価するか、短時間では了解いし合えない問題が山積しているからである。この点で、今回のシンポジウムに大学図書館と法人事務局からの参加者が見られなかったのは残念であり、今後の積極的な参加が求められる。

南山アーカイブズはその中核となり、展示室と収集史料の恒常的活用をリードし、多くの学生、生徒、児童をはじめ、教職員、卒業生、退職教職員、同窓会、友の会などに協力を求めて、盤石な組織を作ること、大いに期待

している。